

演題番号：E2

## 三重県における重症熱性血小板減少症候群の疫学調査—日本紅斑熱との比較—

○楠原 一，小林章人，北浦伸浩，中井康博

三重県保環研

1. はじめに：ダニ媒介感染症である重症熱性血小板減少症候群(SFTS)は、致命率20数%の急性感染症であり、マダニの咬傷以外に患者の体液を介したヒト-ヒト感染や愛玩動物からの感染事例も報告されている公衆衛生上重要な疾患である。三重県では2015年以降、年間数例の報告があるが、今年5月現在、既に過去最多の2019年と同じ5例の報告がある。そこで県内におけるSFTSの疫学的特徴を明らかにする目的で、過去の発生状況を調査し、同じダニ媒介感染症である日本紅斑熱と比較した。

2. 材料と方法：県内で最初のSFTS患者が確認された2015年以降に報告されたSFTSおよび日本紅斑熱の患者情報(性別、年齢、発症日、推定感染地)を感染症サーベイランスシステムから抽出し、両疾患で比較した。また2019年以降に検出されたSFTSVのN蛋白遺伝子の系統樹解析を実施した。

3. 結果：2015年以降に報告されたSFTSの患者数は20例で、年齢は61~91歳(中央値74.5歳)、男女比は11:9であった。一方、日本紅斑熱の患者数は324例で、年齢は1~94歳(中央値73歳)、男女比は154:170であった。両疾患とも主に4~10月に発生し、推定感染地は伊勢志摩地域に集中して

いた。また、系統樹解析ができたSFTSVは10検体で、うち9検体がJ1型、1検体がJ3型に分類された。

4. 考察および結語：SFTSと日本紅斑熱患者の性別には偏りがなく、年齢層や発症日、推定感染地域が酷似していることが明らかとなった。どちらの疾患も患者の多くが高齢者であり、マダニの活動時期に発生していた。また、動物とマダニの間でSFTSVや日本紅斑熱リケッチアの感染環が成立し、ヒトへの感染が起りやすい場所(ホットスポット)が伊勢志摩地域には存在することが示唆された。SFTSVの遺伝子型は8つ(日本型J1~3、中国型C1~5)に分類され、国内ではJ1型の検出が多いが、県内には少なくとも2つの遺伝子型が存在していることが明らかとなった。しかし、隣接する和歌山県ではC4/5型のSFTSVが確認されており、本県も更に多様な遺伝子型のSFTSVが存在している可能性がある。今後、本調査から得られた知見をもとに感染対策や啓発を実施することが重要である。SFTSに対する理解をより深めるためにも調査を継続する予定である。